

2019.3.10 「結婚とは（1）」

「結婚とは（1）」

2019年3月10日

かつて日本の雑誌が「夫婦を漢字一文字で表すと？」というアンケートをとりました。それによりますと20代夫婦は「絆」が一位。60代夫婦は「忍」が一位であったといえます。

40年の年月を経て「絆」が「忍」に変容していく、その実態は何なのか。このようなことを考えますと、そもそも「結婚とは何なのか」ということを私達は考えます。

「結婚」という言葉をグーグルで画像検索しますと、タキシードを着た花婿とウェディングドレスを着た花嫁の写真ばかりが出てきます。仕事柄、結婚を控えたカップルと結婚前のカウンセリングをする際、結婚式や新婚旅行についての話はよく聞きますが「結婚ってそもそも何ですか？」と質問するカップルはいません。

水を差す気持ちはありませんが、結婚式や新婚旅行は長い結婚生活の一日、もしくは数日のことであり、最も大切なのはそれ以降の普通の日々だと思っております。

夫となる人、妻となる人の間で「結婚に対する共通理解」がなければ、遅かれ早かれ食い違いというもの生まれ、時に大きなチャレンジに向き合うこととなります。皆さんにとって結婚とは何でしょうか？お考えになったことがあるでしょうか。

聖書の一番最初には創世記が記されています。その創世記は開口一番「はじめに神は天と地とを創造された」と始まります。

そして、神は5日をかけて宇宙と自然界のあらゆるものを創造します。そして、6日目にアダムとイブという男と女を神様は創造します。聖書はこの男女の関係をこう説明しています「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」（創世記2章24節、25節）。

すなわち、聖書はその冒頭に夫婦となるということ、すなわち「結婚」を取り上げているのです。そして、その後50章まで続く創世記は何について触れているのか、先週もお話ししましたように、それは一組の男女が夫婦となり、その家庭が形成されていき、その家庭の中で起きてくる様々な人間の姿が描かれている書なのです。先週はその中のノアの家族についてお話しさせていただいたのです。

聖書が66巻あるその一番最初に、夫婦と家族について書いているということは、あたかも私達が生きるにあたり、このことが全ての土台となるのだということを暗示しているようです。

この世界には色々な問題があります。人は「法律改正」や「教育改革」によって、その問題を解決しようとしませんが、実のところ、最も大切なことは人間が生まれ、そして巣立っていく、その源なる家族というものに着目する必要があるのではないのでしょうか。

先週、お話ししましたマザーテレサの言葉が思い起こされます「もし、世界を変えたいと思うなら、家に帰りなさい、そして家族を愛しなさい」。そして、この「家族」の始まりは一人の男と一人の女なのです。

今日はこれらのことを踏まえて聖書から結婚について原則的なことを二つ、お話します。このことはとても大切ですので、来週も第二部としてこのテーマでお話ししたく願っています。

ある方にとりまして結婚は今の自分とは関係ないと思われる方がいるかと思いません。しかし、聖書が語りかけることは全て、そのトピックス以上の意味がそこには含まれており、神と人間に対する普遍的真理へと私達を導いてくれるものです。さあ、それでは最初に結婚とは「創造の完成」であるということについてお話ししましょう。

創造の完成

何事も「ある事から」の意味や目的というものを深く知りたいのなら、まずはその「始まり」に目を向けるべきです。この原則に従い、最初に男と女が創造された記録について創世記を紐解いてみましょう。

最初に創世記2章18節の言葉を見てみましょう「神である主は仰せられた「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」。

スッと読んでしまえば何の変哲もない言葉かもしれませんが。エデンの園の最初の住人はアダム。このアダムに対して人類最初の女性エバが与えられたというのです。

創世記は壮大な天地創造のドラマで幕を開けます。第一章では物理的世界の第一原因である神が私たちの住む太陽系や銀河、地球を構成している様々なものを造られる様がうかがい知れます。

それは光から始まり、水、魚、鳥、哺乳類と創造されていきます（興味深いことにこの順番は今日、進化論が言うところの順番と同じです）。そして、神様はその度ごとに自らが造られたものを見て「良しとされた」と創世記は記録しています（創世記1章4節、10節、12節、18節、21節、25節）。

そして、その全ての働きを総括して その一番最後に「それは、はなはだよかった」（創世記1章31節）と書いています。それは「これ以上ないほどに最高によかった」ということです。それはデタラメなものではなくて、そこには美しい秩序があったのです。

私たちは自然を見て、感動することが度々あります。皆さんも海に沈む夕日や、道端に咲いている一輪の花に息を飲んだということがあるでしょう。それもそのはず、私達は神が「とても良い」と言われた自信作を見ているのですから。

しかし、ここにきて神様はたった一つだけ「よくないこと」について触れています。何だと思いませんか。それは、「人が一人でいるのは良くない」（創世記2章18節）ということなのです。

最初に神のかたちに造られたアダムの上には創造者である神がおられ、その神のもとに彼は生活するようになりました。そして、彼には神からしっかり管理とケアをするようにと託された動植物がいました。しかし、彼には共に神の前に生き、与えられている使命に生きるパートナーがいなかったのです。そこで神様はアダムとエバを与え、彼らは共に生きるようになったのです。

このところで私達が心に留めなければならないことは、この二人の男女が結ばれるということは、一連の天地創造と区別されてはいないということです。すなわち、結婚は天地創造の秩序の一つであり、もっと言いますと、この男と女の結婚なしに天地創造は完成しなかったのです。これが聖書における結婚の位置づけです。そこに秩序がある限り、そこには法則もあるわけで、結婚には意味とルールがあるのです。

私達がこのように結婚の原点というものを見、万物が健全に存続していくためにこのことが欠かすことのできないものであり、そこには私達の個人的な決断以上のものがあると分かるならば、私達は結婚を非常に尊いものとして尊重することになります。こうなってくると「結婚とは一枚の紙切れ」ではないということが分かってきます。

結婚とは二人だけの事柄ではなく、そこには神の創造の秩序が関わっている。そして、神の創造の一部である、この結婚生活を通して、その夫婦は、二人の生涯を通して創造の始めなる神の栄光を表すという目的が与えられているのです。

ここで注意していただきたいことは、私達は今、ここで結婚というものに注目していますが、それでは未婚者や独身者はどうなるのかということです。イエス様は生涯、独身で過ごされた方ですし、イエス自身もマタイ伝の中で言っています「というのは、母の胎から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい」（マタイ19：12）。

自らも独身でありましたパウロも1コリント7章で結婚と独身について触れています。「わたしはあなたがたが思い煩わないようにしてほしい。未婚の男子は主のことに心を配ってどうかして主を喜ばせようとするが、結婚している男子はこの世のことに心を配ってどうかして妻を喜ばせようとして、その心が分かれるのである。未婚の婦人とおとめとは、主のことに心をくばって、身も魂もきよくなるようとするが、結婚した婦人はこの世のことに心をくばって、どうかして夫を喜ばせようとする。わたしがこう言うのは、あなたがたの利益になると思うからであって、あなたがたを束縛するためではない。そうではなく、正しい生活を送って、余念なく主に奉仕させたいからである」。

独身として生きるということが、既婚者と比べて云々ということが言われることがあります。しかし、聖書はこの二つの間に優劣をつけてはいません。かえって、独身であることによって、余念なく神に仕えることができることを記しており、それはとても尊いことなのだとして記しています。

すなわち、既婚者であっても、独身者であっても、その人が置かれている状況でその人に託されている使命があるのです。二つ目の事、それは「二人は一体となる」ということです。

二人は一体となる

もう一つ大切な聖書箇所を見てみましょう。「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」（創世記2章24節—25節）。

エペソ書の中でパウロはこの箇所を取り上げて「この奥義は大きい」（エペソ5章31節）と言っています。聖書はこの人類最初の男と女について、「男と女は一体」となると言い、それを「奥義」と呼んでいます。これは文字通り、二つのものが一つとなるということです。

創世記2章21節—22節を見ますと「そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つをとって、その所を肉でふさがれた。主なる神は人

から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた」と書かれています。

この「あばら骨」とはヘブル語で「サイド」という意味があります。あばら骨は私たちが触って分かるように右左にあります。その一つをとって女を作ったのです。すなわち、ここにきてイブはアダムのサイドから造られました。その彼女がアダムと結ばれるということは、まさしく取られたサイドが元に戻ることであり、それは一つとなるということです。

人間が感じるストレスのランクを記した表があります。私たちは常に何かしらのストレスの中に生きていますが、そのストレスランキングの一番は何か知っていますか。一番は「愛する者との死別」です。そして「離婚」も上位にあります。その前も後もとてつもないエネルギーと癒しと回復を必要とするものです。なぜなら、これらにはかつて一つであったものが、裂かれる痛みがともなうからです。

ここでいう「結び合う」という言葉には二つの意味があると思います。まず、精神的・霊的な意味で一つとなるということ。そして、肉体的に一つとなるということです。そして、これらは区別されるものではなく、二つにして一つなのです。そして、ここで使われている「結び合う」という言葉には「接着する」という意味が込められているのです。

昔、アロンアルファという瞬間強力接着剤が世に出てきた時、子供だった私はそれで色々なものをくっつけて遊びました。そんな時、指と指をくっつけたところ、本当にとれなくなり、カッターで皮を剥がなくてはなくなり、泣き泣き指と指を離しました。

なぜ、死別や離婚が痛みをもつのか。一つであったものが、結び合い、接着していた者同士が離されるからです。その痛みは計り知れません。聖書は絶対に離婚はいけないとは言っていない。そこには色々な事情があるからです。しかし、その痛みはとても大きいものでありましょう。

ですから、どうかそれが回避できたらと思います。ゆえに牧師は結婚式において、誓約が終わり、いよいよ、最期に二人が手を組んで退場する時に、祈り心をこめてこう宣言をします。

今、太郎と花子は神とここに集まった家族・友人の前に互いに結婚の誓いをし、その証拠として共に手を取り合い、指輪の交換をすることにより彼らの決意を証明しました。そこで、私は今、ここでお二人が父なる神、子なる神、聖霊なる神の名のもとに夫婦であることを宣言します。神が結び合わせたものを誰も引き離してはなりません。アーメン

日本人の間でキリスト教式の結婚式は依然、人気が高く、今日の結婚式の6割がたはチャペルでなされるといいます。日本のホテルには立派なチャペルを併設している所があります。中には本物の牧師ではない者もあり、どういうわけか欧米の牧師（役者？）に人気があります。「あなたは、かーみの前で・・・」とたどたどしい日本語が魅力的なのでしょうか。

チェペルの結婚式でウエディングドレスを着て、新郎新婦共々に神の前に誓約をするということは、神聖でロマンチックなものとして受け入れられているのかもしれない。でもその式の後にこれらのカップルが日曜礼拝に行き始めるかと言うかと、そんなことはないのです。

それよりも式後の祝会、そしてしばしの新婚旅行のことで新郎新婦の心はその時、いっぱいなのかもしれません。彼らはしばらくのハネムーンピリオドを楽しみますでしょう。しかし、そこから先は互いの裏も表も見せ合う日々のルーティンが続きます。先のアンケートに従えば、これらの年月を経て行きついた先に「忍耐」という結論が出てくるというのです。

「二人が一つとなる」ということについて、どうしても語らなければならないことがあります。それは聖書は「夫婦の性的な交わり」を「その妻を知る」という言い方をしているということです（創世記4章1節）。別の言い方をすれば性の交わりとは、正しい意味で「相手、異性を知る」ことのスタートなのです。

私たち男と女は体の形が違います。そして、それは姿だけではなく、男性と女性は考え方が違います。以前、「Men Are from Mars, Women Are from Venus」という本が話題となりました。まさしく男は火星から、女は彗星からやってきたかのように男女は色々なことが全く異なるのだということを説明する本です。

結婚生活とはその神が各々に与えられている考え方の違いを発見していく、果てしのない旅が始まるということです。互いに相手はまさしく「神の秘めごと」、すなわち「神秘」に包まれているのです。その今まで向き合うこともなかった相手に自分を隠すことなく、全身で向き合うことが性です。

そして、この知るというのは、互いの体の相違だけではなく、互いの深い心の内までも知るということです。一つとなるということは相手の心も体も知るということ土台にしています。そして、これには終わりがありません。私たちは生涯かけて自分の向き合うパートナーを知っていくのです

しかし、今日、この「知る」ということに対して、最近「お試し」ということが当たり前になってきています。今日の世界においてこの「お試し」はもはや普通

に受け入れられ、それが効率的だと奨励さえされるようになりました。今日、お試しはショッピングだけのことではないのです。

この辺りのことについて、「小さな命を守る会」の主事をしている水谷潔先生が「命と性の日記」というブログでこんなことを書いておりました。アメリカで300万部以上売り上げ、世界で34の言語に翻訳されているというゲーリー・チャップマン著「愛を伝える五つの方法」という本があります。

その本にはアメリカでなされた調査結果として「結婚前に同棲したカップルの離婚率は同棲しなかったカップルより高い」ということを示しています。つまり、このことは同棲が結婚のお試し期間として機能していないということを表しています。

このことについてチャップマンは「結婚は模擬実験ができないもの。結婚関係の中心は「コミットメント」、すなわち「献身」と「約束」があると言っています（まさしくその通りです。これが結婚の本質です）。

しかし、同棲にはこれらがなく、どちらか一方が立ち去ろうと思った時点で立ち去ることができる」と説明しています。

するどい言葉です。結婚生活の本質が共同生活をすることや性関係だけなら、確かに同棲によって相手を知ることができ、生涯のパートナーとしてふさわしいかどうかの判断材料にもできるでしょう。

しかし、このことには致命的な欠陥があるのです。それは結婚の本質がコミットメント（忠誠）なら、同棲によるお試し期間は無意味なことだということです。

結婚関係同様の生活を送っているように思えても、コミットメントがなければ、それは結婚の真似事にもならないでしょう。「どちらか一方が嫌になればやめてもよい」という関係はいつまでたっても結婚の準備にも、お試しにもなっていないということを私達は知らなければなりません。

もうお気づきでしょう、確かに彼らは結婚前に互いを知ることができる、しかし、それは先にお話ししました聖書がいうところの「知る」とは異なるのです。

そもそも、そのお試し期間は誰のためにあるのかといえば、相手のためではないでしょう。自分のためでしょう。この人は自分に合うのか、私のためのあなたという考え。つまりその中心には自分がいます。

インテリアと同じように、生涯のパートナーも自分の快適な生活環境のために必要なもの。彼、彼女は自分の生活の必要や性的欲求を満たす生活環境の一部としてのパートナーなのでしょうか。

「人生を共に生きることを約束していない」のですからその関係は、条件と期限つきです。食品の賞味期限が過ぎれば、廃棄や交換がなされるように、相手が自分の望んでいる生活環境を提供できない人になれば、お別れそして、交換。

考えてみれば同棲という生活形態は、高度産業化社会の中、すべてを消費者目線で生きる現代人らしい歪み、その場での直感や感情や衝動に生き、何ものにもコミットできない現代人らしい寂しさの表れではないかと先生は書いています。

「恋して、交際、性関係、離別」というパターンを繰り返すだけの恋愛、結婚を考えて同棲を始めても、結婚に移行しない場合の傷や痛み。同棲を経て結婚したカップルの女性は、結婚後に深い怒りを持っているとの記述もあります。

もしかしたら、自分をお試し商品として、好ましくなければ使い捨てにしようとした互いへの怒りが心の深層にあるのかもしれませんが。聖書、箴言にはこのような言葉があります。

「あなたは自分の水ためから水を飲み、自分の井戸から、わき出す水を飲むがよい。あなたの泉を外にまきちらし、水の流れを、ちまたに流してよかるうか。それを自分だけのものとし、他人を共にあずからせてはならない。あなたの泉に祝福を受けさせ、あなたの若い時の妻を楽しめ。彼女は愛らしい雌じか、美しい鹿のようだ。いつも、その乳房をもって満足し、その愛をもって常に喜べ」（箴言5章15-19）。

この箴言には「あなたの泉に祝福を受けさせ」と書かれていますが、この箇所に限れば、この泉とは妻のことであり、すなわち愛は一方通行ではない、それは常に相手にその愛を与えていくということなのです。そして、それは肉体的な関係のみに限ることではなく、私達の全人格を通してそのことはなされていくべきものなのだと聖書はいうのです。

結婚は神の前にコミットした男女が一体となることです。もちろん、二人の生活には様々な違いがあるでしょう。しかし「私のためのあなた」ではなく、「あなたのための私」というコミットメントが、結婚生活の中に起きる諸々の問題に二人で向き合い、それを乗り越えていく力となるのです。

結婚について今日はお話ししました。今日はここまでにしましょう。皆さんはどう思われたでしょうか。生まれて初めてこんな話を聞いたという方、いるかもし

2019.3.10 「結婚とは（1）」

れません。なんとも時代遅れも甚だしいと思われた方もいるかもしれません。もしかしたら、腹をたてた方もいるかもしれません。

しかし、私は信じます。おそらくこの地上で私達の幸いを最も願っている人が、私達に最も厳しい言葉を包み隠さずに語りかけるということ。神はあなたを愛している。その愛は時代遅れと言うような言葉で取り消すことが出来ない、もっと本質的なものであり、私達の存在を根底から支えるものです。

今日、この世界の有様を垣間見る時に、この聖書が今も私達に語り続けている言葉の中に私達が従うべき真理があるようには思われませんか。もし、そう思われる方がいらっしゃるのでしたら、もう一度、この原点に立ち返り、ここから始めましょう。それでは、また来週、このテーマについて続きをお話しします。

お祈りしましょう。